



発行：NPO 法人シャローム事務局

〒960-1241 福島県福島市松川町字東原 17-3
TEL / FAX 024-567-5322

Web <http://www.nposhalom.net>
E-mail info@nposhalom.net

発行責任者：大竹静子

「まちなか夢工房」の施設化に向けて



NPO 法人シャロームが福島市から「障がい者コミュニケーションサロン運営事業」の委託を受け「まちなか夢工房」を始めたのは平成十五年十月、それが平成二十七年三月で終了することとなります。

十一年六月の長期にわたり「まちのパン屋さん」として親しまれ、多くの障がいを持つ仲間たちが働く職場としての役割も担ってききましたが、昨年十一月末に何の事前連絡もなく事業の終了を通告されたことになりました。

シャロームでは、緊急理事会を行い今後に向けての前後策を検討し、正確な状況確認のため、市に対して事業終了の経緯とこれまでの「まちなか夢工房」への評価を書面での説明を求めました。

— 福島市の回答より廃止の理由を抜粋。

障がい者コミュニケーションサロン運営事業については、①近年、創作的活動又は生産活動の機会の提供を行う日中活動の場となる事業所が、平成十五年の開設当時より増加しており、障がい者の就業機会の拡大が図られている。

②平成二五年の障害者優先調達推進法の施行に伴い、授産活動としての販売機会が拡大

するとともに、対面販売等の場が増え、市民との交流の場が多く創出されてきている。

③インターネット等の広報紙の発達により、情報発信力の強化が図られてきている。

上記の理由から、初期の目的は達成されたものと判断し、本事業の今年度での廃止決定に至ったということです。評価については、これまでの実績を高く評価いただいておりますが、内容は省略します。

大家さんもほぼ同時期に市との賃貸契約の解除を通告され困惑している状態で、「シャロームさんが借りてくれるのであればできるだけの協力を行います。」との内諾を得て、四月以降の「まちなか夢工房」の存続を最優先に検討に入りました。

市の事業廃止の理由が、障がい者を取り巻く状況変化の中で、市独自の事業は必要がなくなつたとの見解であることから、話し合いによる状況の見直しの可能性はないものと判断しました。

「まちなか夢工房」の内容を継承しながら続けていくためには、障がい者の福祉制度に対応した運営に組み替えるざるを得ないと判断し、就労支援A型という施設への移行が決定されました。A型施設

への移行が、現在夢工房で働くスタッフにとって最良の方法であるとの結論に至り、一月中に関係書類を県に提出、三月に入り現場確認を経て、四月開所を目前に最終段階に入っています。

移行後の運営母体は、NPO 法人シャロームから一般社団法人シャローム福祉会に移行します。一般社団法人シャローム福祉会では、すでに就労支援B型施設「ベシツク憩」を運営しており、「まちなか夢工房」は施設の増設という扱いになります。

ボランティア活動として始めた「障がいを持つ人もたない人も共に生きる社会」を目指すシャロームの活動は、社会状況の変化の中で、制度外の課題に取り組んできた「NPO 法人」の活動と福祉制度の活用のための「一般社団法人」の活動に分化され新たなシャロームの目指す活動のための両輪として動き始めています。

制度は社会の要請で作られますが、常に不十分な面を持ち、市民の手によって補完されてきました。すべては今を生きる人間の幸せの追求から始まります。シャロームの原点に立ち返り、「まちなか夢工房」を守っていきたく思いますので、新生「まちなか夢工房」をよろしく願います。代表 大竹静子



三月に入り震災・原発事故から四年が経過したということ、連日マスコミの紙面を賑わしている。十一日には、追悼式等も各地で行われた。安倍総理も福島県の復興を叫ぶ。十四日から十八日の予定で国際防災会議が仙台市を中心に開催される。福島市でも関連イベントが、四年間という時間の経過の中で、震災と原発事故はどのようなか。四年間という時間、震災・原発事故に対し、当時の状況を検証するための十分な時を与え、多くの研究成果が発表されてきている。防災会議の議論は、三三ものテーマで行われるという。世界の最先端の研究者がさまざまな方面からの議論を繰り広げることになる。

一人の人間は一箇所の場面しか遭遇できない。しかし、専門分野を分担し英知を統合していくことで、一人の経験が全体の経験に統合されていく。この世界会議の成果も、多くの人々の手を経て、これからの未来に有効な英知として整理されていくに違いない。

多くの命を一瞬にして奪い、住む土地を奪い、住む土地を汚し、その破損した原子炉の状況がいまだに良くわからない。原発は、人間の英知を集め開発された。そして今、その原発の事故への反省から、新たな未来に向けた英知の結集が求められている。防災会議がこのための場となることを切に願う。(T.O)

受入メモ 中長